

本稿の目的は、A.N.ホワイトヘッド(1861-1947)が、自身の哲学を形成するさいに、いかに進化論を受容したのか明らかにすることだ。本稿は、生物学者 L.J.ヘンダーソン(1878-1942)の「環境の適応 (fitness of environment)」に注目して、そのことを論じていく。

これまで、ホワイトヘッドの進化論受容を論じることは困難であった。彼は、影響を受けた思想に言及することが少ない哲学者であるのに加え、参照できる資料は出版された諸著作や少ない手紙等に限られていたために、明確な根拠を示してホワイトヘッド哲学の形成過程を論じていくことが難しい状況であった。そのため、諸著作において進化論に関する言及はいくつかあるものの、彼の哲学に進化論は深くかかわっていないという説が有力なものとなっていた (Lucas 1989)。

しかし、2017 年から新資料として、講義論が出版されはじめ (Whitehead 2017)、研究状況が大きく変わりつつある。ホワイトヘッドは 1924 年に英国から米国に移住した。そして、同年9月から彼はハーヴァード大学で講義をはじめた。出版された講義録は、その講義の聴講生によるノートである。新資料の研究によって明らかになったのは、ホワイトヘッドは様々な思想との格闘を通して自身の哲学を練りあげていったことである。彼が影響を受けた思想も明確になり、彼の思想形成に関する研究が本格化しはじめている。新資料の研究成果の一つとして、明らかになったのは、ホワイトヘッドは進化論に影響を受けた当時の有機体概念を受容することで自身の哲学を形成したということであった (Bogaard 2020, Sölch 2020)。

ホワイトヘッドは自身の哲学を「有機体の哲学 (philosophy of organism)」と呼んでいる。しかし、新資料以前の研究において「有機体」概念の内実を論じるものは非常に少ない。彼の思想背景をとり出すことが困難であることも手伝い、生物の時間幅をもった活動を電子などの考察に応用したことから有機体という言葉を用いているだけであり、彼の有機体概念に深い意味はないとコリングウッドは主張している (Collingwood 1945)。しかし、H.バルクソン、J.S.ホールデン、C.L.モーガン、S.アレクサンダー、W.M.ホイラーそしてヘンダーソンなどによる、進化論の考察によって形成された有機体の概念に、ホワイトヘッドは強い影響を受けてハーヴァード講義を行っていたのである。

本稿では、ホワイトヘッドが受容した有機体概念を詳しく論じることはできないが、しかし、そのことに深くかかわるヘンダーソンの進化論を扱う。ヘンダーソンの進化論に、ホワイトヘッドが特別影響を受けていることは新資料から読みとることができ、そのことは先行研究でも指摘されている (Bogaard 2020, Sölch 2020)。しかし、先行研究の主眼は、従来の研究に反してホワイトヘッドが進化論を深く受容していたことを提示することのみであり、なぜホワイトヘッドが他の進化論ではなく、ヘンダーソンの進化論から深い影響を受けたのかを明らかにするものではない。そのことを見逃してしまうと、ホワイトヘッドが進化論から何を学ぼうとしたのか、という目的にまで踏み込んで議論を展開することはできないだろう。なぜなら、ホワイトヘッドがヘンダーソンの進化論に対して注目したのは、「環境の適応」であり、これは他の進化論がもつ生物の進化という視点とは異なった、新たな観点を提示するものだからだ。このことを踏まえれば、新資料以外の文献において、一般的な進化論からの深い影響をホワイトヘッド哲学に見出し難いことが理解できるだろう。

したがって、本稿は、(1)ヘンダーソンの進化論がいかなる特徴をもっていたのか、(2)ホワイトヘッドはどのような視点のもとにヘンダーソン進化論を自身の哲学に取り入れたのか、という二つの視点から議論を展開していくことになる。

(1)ヘンダーソンに関して、主に『環境の適応 *The Fitness of environment*』(1913)と、『自然の秩序 *The Order of Nature*』(1917)を参照する。ヘンダーソンの進化論は、ダーウィン進化論を補完するものであり、生命起源にかかわるものとして解釈することができる。ダーウィン進化論は環境を所与と捉え、環境へ有機体が適応することのみを論じているだけであると、ヘンダーソンは批判している。ヘンダーソンが考えているのは、環境の有機体への適応である。ただし、彼は、有機体と環境との相互の適応と表現してはいるものの、生物によって環境が直接変化していくことを論じているわけではない。環境の適応とは、環境が現存の有機体にもっとも適応したものであるということである。つまり、生命起源に対する環境の適応を論じているのである。このような考え方は、宇宙が有機体を生むように存在しているとすれば、いかなる初期状態を考えられるのか、という視点とみなされ、現在では「人間原理 (Anthropic Principle)」の考え方に重なるものとされている (Fry 1996)。

(2)ホワイトヘッドはヘンダーソンの議論をうけて、「環境の可塑性 (the plasticity of the environment)」を主張するようになる。そして、環境の可塑性は、進化と永続性 (permanence) の問題を解く鍵であるとホワイトヘッドは述べている (Whitehead 2017)。先行研究において、ヘンダーソンが環境を変項として扱うことが、ホワイトヘッドに影響を与えていると強調されている (Bogaard 2020, Sölch 2020)。しかし、それだけでは、環境が有機体に安定性 (stability) — 永続性の議論につながる— を提供することをホワイトヘッドはヘンダーソンから読み取り、自身の哲学を形成したことを見過ごしてしまうことになるだろう。本稿では、ホワイトヘッドが環境の変化のみならず、環境が有機体の安定性に寄与するものであることも論じていることに注目する。このことは、無機物と有機体との相互関係を環境の適応によって論じることで、機械論と生氣論との調停を試みたヘンダーソンの有機体思想を明確に捉えたものと考えられる。ヘンダーソン思想は、有機体の出現に物的な環境が寄与する視点をホワイトヘッドに提示した、一つの例だったのだ。

以上によって、本稿は、ホワイトヘッドが受容した進化論がいかなるものであるかを明確にするとともに、ヘンダーソンの環境の適応から、ホワイトヘッドが何を学び取ったのかを明らかにする。

参考文献

- Bogaard, P.A. (2020) "Whitehead and His Philosophy of Evolution", *Whitehead at Harvard, 1924-1925*, B.G. Henning and J. Petek (eds.), Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 75-88.
- Collingwood, R.G. (1945) *The Idea of Nature*, London: Clarendon Press.
- Fry, I. (1996) 'On the Biological Significance of Properties of Matter: L.J. Henderson's Theory of the Fitness of the Environment', *Journal of the History of Biology*, 29:2, 155-196.
- Lucas, G. (1989) *The Rehabilitation of Whitehead: An Analytic and Historical Assessment of Process Philosophy*, Albany: SUNY Press.
- Whitehead, A.N. (2017) *The Harvard Lecture of Alfred North Whitehead, 1924-1925: Philosophical Presupposition of Science*, ed. P.A. Bogaard and J. Bell, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Sölch, D. (2020) "Whitehead's Biological Turn", *Whitehead at Harvard, 1924-1925*, B.G. Henning and J. Petek (eds.), Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 100-115.